FRONT
OF
VIEW

車椅子でロンドンを行く

●

第一生命経済研究所 名誉所長
加藤 寛

しばらく足や腰の痛みで外国行きを中止していたが、この９月にロンドン・ケンブリッジで会議があって出かけることにした。車椅子で出かけて大丈夫かなと不安はあったが、日本と比較できてよかった。

航空便は、日本の航空会社を利用させていただいたが、さすが国際競争をたたかっているだけあって客扱いは見事であり、ほぼ満足できた。

しかしロンドンに着いてみると、古い街の道路には段差は多く、レンガ通りはいうまでもなく、ひっくり返された石が散らばっていた。車椅子を動かす度にガタゴトガタゴトして運ばれていく者にとっては、石にぶつかるたびに心臓にひびく思いがある。

古い建物は立派だがほとんどが段差を越えなければ中に入れない。個人の家でも玄関にスライド板を置いてくれるから入れるが、これは相当迷惑をかけることになる。

個人の家庭なら仕方ないとしても、ホテルの設備も遅れている。東京のようにホテルの建設ラッシュになると、最新の設備をつけているから使い易いが、ロンドンの場合はどうしても古い設備を改修しているだけだから客からみると不満がなくはない。

部屋に置かれているベッドは、外国人向けだから、高くてまず日本人の足腰の悪いものは飛び上がるのも大変だ。二台ある電話もなぜか一台は壊れている。バスルームの入口は車椅子で入れるところもあるが、段差があるとどうにもならない。バスタブも足腰不自由なものには、つかまる棒の位置が思うようになっていない。一番日本と違うのは、ウォッシュレットの存在だ。これは、日本独特のも

のだから、望むのは無理かもしれないが、固定したシャワーがいまや日本的シャワーに変わったことを考えれば、日本式の世界的普及も夢ではない。多くのバリアフリールームは、バスタブがなくシャワーだけになっているが、これではドップリ浸かることもできない。レストランでも、なかなか段差があって入れない。

こうみてくると、決してイギリスがハンディキャップドピープルに快適とはいえないと思うのだが、自然環境はすばらしい。ケンブリッジ大学の周りは、グリーンベルトで囲まれていて、その中に企業が入ることは許さずに、大学としての研究環境を守っている。研究の閃きは、象牙の塔からではなく、豊かな自然環境から突然生まれるといい、その証拠にケンブリッジ大学の、ノーベル賞受賞者数は世界一を誇るという。ケインズをはじめとして多くの学者が、よく訪れ、その自然を楽しんだザ・オーチャードというリンゴ園がある。それが売りに出た時、ここを守らなければと、一老人が買い取ってその環境を維持している。このように開学800年を間もなく迎えるケンブリッジ大学は、頑固に当初からの方針を堅持していた。周りが緑で覆われしかも豊かな自然以外何もないところが、研究環境に良いと聞いて、ふと慶應義塾湘南藤沢キャンパスを思い出し、巣立っていった若者たちの活躍が頭をよぎった。

私は車椅子で動きにくい国という印象を持ったのだが、車椅子の押し手は、日本の方が大変だという。こればかりは主観の相違かもしれない。

しかし、私と押し手で一つだけ共通したことがあった。それは、車椅子が動くとき、その前方の人がさっと道をあけ、エレベーターのドアを押さえるなどいつも車椅子に気を遣ってくれることだ。このマナーの違いだけは、はるかにイギリスの方が優れていた。設備や施設は新しくなっても、人のマナーに関しては、日本は遅れている。車椅子の前方を妨げて平気でいたり、エレベーターに乗るのを邪魔されたりすることは日本ではよくあることだ。もちろんキチンと考えてくれる人もいるから、徐々によくなっていることも嬉しいことだ。

本号には難聴の問題がとりあげられ、さらに死生観の論文が掲載されている。いずれも日本人のマナーに突き刺さる問題がある。イギリス人のような優しいマナーを育てるには、長い歴史の積み重ねが必要である。日本人もまずマナーあってこその老後ではないか。